

岡倉天心著「東洋の思想」講談社学術文庫 1986年2月10日刊を読む

足利時代(1400年-1600年)とは何かを考える

1. 足利時代というのは、幕府を継いだ源氏の分かれの名をとって名づけられたものである。この時代は、鎌倉時代の英雄崇拜の当然の結果ではあるが、近代芸術の真の音調、即ち文学的意味における浪漫主義、を打ち鳴らしている。 P145
2. 足利期の名匠たちの時代この方、日本の芸術は、豊臣および徳川の時代にわずかに退歩をみたとはいえ、着実に東洋的浪漫主義の理想——すなわち、芸術における最高の努力としての精神の表現——を守り通してきた。この精神性は、われわれにあっては、初期キリスト教の教父たちの禁欲的潔癖主義でもなければ、ましては擬ルネッサンスの寓意的理想化でもなかった。それは、マンネリズムでもなければ、自己抑制でもなかった。精神性とは、事物の精髓もしくは生命、万物の霊の特性化、内に燃える火、と観念されたのであった。
3. 美が宇宙に偏在する根本枢要すうようの原理であった——それは、星の光の中に、花の紅の中に、行く雲の動きの中に、流れる水の運びの中に、そのきらめきを見せた。宇宙の大霊が人にも自然にも一様にいきわたり、宇宙生命を観想することによって、それはわれわれの前に展開した。生存の驚異すべき諸現象の中に、芸術精神はみずからを映し出すべき鏡を見出し得た。かくして、足利時代の芸術は、これに先立つ二つの段階の所産とはまったく異なった様相を帯びている。それは漢の青銅あるいは六朝りくちようの鏡などの形式主義的美しさのように、十全でも調和的でもなく、またそれは、奈良の三月堂の諸像に見出す静かな哀感や感情の安らぎ、高野山の源信原信の菩薩たちの完璧の壮麗さや洗煉せんれんされた理想美などに満ちているものでもないが、しかもなお、これら前代の創作品には見出すことのできない一種の直截ちよくせつと統一とを、見る者の心に印せしめる。それは心に語りかける心であり、強い、そして自己を拒否する心——純一なるがゆえに、動くことのない心である。
4. 足利期の理想は、その根源を、鎌倉時代に優勢となった仏教の一宗派禅宗に負っている。「禅」とは、最高の安息における瞑想を意味するディヤナ〔「禅那」ほんご。梵語〕からきたものであるが、西暦520年に僧侶として中国にきたインドの王子菩提達磨ダルマを通して、その国にはじめて伝えられたものである。しかし、それは中華の地に移植されて育つ前に、まず老荘の思想を同化しなければならなかったもので、そして、そういう形においては、唐朝の末頃になってその出現を見せている。馬祖ばそや臨済りんざいの教義は、この宗派の最初の唱道者のそれとは明確に区別されるものである。禅思想とは、それゆえ、一つの発展であって、鎌倉および足利期の僧侶たちによって後世に伝えられるようになった系統のものは南方禅で、この宗派の始祖たちの教えた形式を依

然として固守した北方禅とは、大いに異なるものであった。というのは、この頃までには、この思想は立派に個人主義の一派となっていたからである。この思想の靈感を受けて、鎌倉の戦鬪的英雄たちは、キリスト教の教会の宗教的英雄のごときものとなった。——アレキサンダーがイグナチウス・ロヨラ〔スペインの軍人で僧、イエズス会の創立者〕に変貌したのである。征服の観念は、人間自身の外にあるものから内にあるものへと移ることに、完全に東洋化した。剣を用いることではなくて、剣であること——純潔で、清澄で、不動で、常に北極星を指す剣であること——が、足利武士の理想であった。あらゆる形の知識がその中に閉じ込める傾きのあった束縛から、思想を解放する手段として、すべてのものが、霊の中に求められた。禅は、形式や儀式を無視するという意味において、偶像破壊的でした。悟りを開いた禅僧によって、仏像は火中に投ぜられたのである。言葉は思想に対する邪魔物と考えられ、禅の教義は、切れ切れの文章と力強い隠喩で表出された。これは、中国の文人連の推敲に凝った言語を頭から軽侮したものであった。

5. かくして、かれらの修練は、真の自由の精髓であるところの克己の方法にその中心が置かれた。迷える人間の心は、属性を本体と見誤ったがゆえに、暗中を模索した。宗教的な教えでさえ、仮象を実体として掲げるかぎりにおいて、人を誤るものであった。この思想はしばしば、水中に映る月の影を捉えようとする猿の比喻によって説明された。すなわち、白銀の映像をつかみ取ろうとする努力は、そのいずれも、鏡なす水面を波立たせることができるばかりで、幻の月を砕くのみか、かれら自身をも破滅させる結果に終わる、というのである。いわゆる八万四千〔インドにて慣用的に多数をあらわす〕の知識の門の入念精緻な經典も、猿学者たちの無意味な饒舌のごときものであった。自由は、ひとたびそれが達成されると、万人を全宇宙のもろもろの美に歡喜し愉悅するにまかせた。かれらはそのとき自然と一体になり、自然の鼓動が同時にかれら自身の内に脈搏つのを感じ、かれら自身も自然の息吹を宇宙の大霊と一体となって呼吸しているのを感じた。人の生は、同時に小宇宙的であり大宇宙的であった。生も死もひとしくひとつの普遍的存在の異なる相にすぎなかった

P149 ~ 154

[コメント]

足利時代(1400年 - 1600年)の文化・思想的特徴を世界に知らしめた岡倉天心先生。日本の中世の精神を理解することは、日本のアイデンティティを知る上で不可欠と考える。

足利時代という表現を今後は用いたい。

- 2009年7月2日林明夫記 -